

2024年6月2日

キリストの聖体の主日

菊地功大司教 メッセージ

主イエスは、最後の晩餐において聖体の秘跡を制定されました。主御自身は、その直後にご自分が捕らえられ十字架への道を歩むことで、最愛の弟子たちとの別れが迫っていること、そしてその弟子たちがこれから起こる出来事のあまりの衝撃に打ちのめされ、恐れにとらわれてしまうことをご存じでした。まだまだ弟子たちに伝えたいことは多くあったことでしょう。その弟子たちへの思い、そして弟子たちを通じてわたしたちすべてへの思いを込めて、主はパンをとり、「わたしの体である」とのべ、また杯をとって「わたしの血である」とのべられました。主の心持ちは、その次のことば、すなわち、「わたしの記念としてこれを行いなさい」に込められています。「わたしのことばを、わたしの行いを、決して忘れるな」という切々たるものであります。すべての思いを込めて、すべての愛を込めて、主は聖体の秘跡を制定され、愛する弟子たちに残して行かれました。

この主の思いは日々のミサにおいて繰り返され、わたしたちがミサに与り、聖体を拝領するごとに、あの晩、愛する弟子たちを交わりの宴へと招かれた主イエスの御心が、わたしたちの心を満たします。

教皇ヨハネ・パウロ二世は、「教会にいのちを与える聖体」に、こう記しています。

「教会は過越の神秘から生まれました。まさにそれゆえに、過越の神秘を目に見えるかたちで表す秘跡としての聖体は、教会生活の中心に位置づけられます。(3)」

その上で教皇は、「聖体は、信者の共同体に救いをもたらすキリストの現存であり、共同体の霊的な糧です(9)」と記し、聖体が個人的な信心のためではなく、共同体の霊的な糧であることを明示します。

ご聖体は共同体の秘跡です。そもそもミサそれ自体が、共同体の祭儀です。聖体は一人で受けたとしても、共同体の交わりのうちにわたしたちはご聖体をいただきます。それ

は司祭がひとりでミサを捧げても、個人の信心のためではなく、共同体の交わりのうちにミサを捧げるのと同じであります。ご聖体は、共同体の秘跡です。

教皇様は2025年の聖年のテーマを「希望の巡礼者」とされることを決定され、先日の昇天の主日に、聖年を布告する大勅書「Spes non confundit（希望は欺くことはありません）」を発表されました。その中で教皇様は、教会共同体が時のしるしを読み取り、総合的な人間開発の視点から、人間の尊厳をおとしめるような状況にある人たちにいのちを生きる希望をもたらす共同体であることを求められています。そのために、巡礼というのは、単に個人の信心の問題なのではなく、共同体としてともに歩む中で、教会こそが社会にあって希望を生み出し、歩みの中で出会う人々に希望をもたらす存在となることが重要であると指摘されます。

ともすれば聖年にしても、ご聖体にしても、個人の信心の視点から意味を探ろうとしてしまいますが、今私たちに求められているのは、まさしくシノドス的な教会として、ともに歩むことによって、主の現存を告げ知らせ、希望をもたらす教会となることです。

あの晩ご聖体の秘跡を制定された主は、どのような状況にあっても、いつもわたしたちとともに歩んでくださいます。